

白川静のことば  
 《10》


金子都美絵・画

空を流れたただよう雲にも、精霊がある。それは竜の形をしたものであった。雲の初文である云の字形は、雲気のためよう下に、竜尾を捲く形がみえる姿である。雲上に住む竜という観念は、どこから生まれたのか知られない。ともかく精霊たるものには、実体がなくてはならないのである。

〔中略〕

旬もまた雲と同じように、字の下部は尾を捲いた竜の形である。全文の字形には、そのなかに日の形を加えているものがあるから、この竜は日をまもる天上の靈獣とされていたものかもしれない。しかしそれにしても、旬とは十日をいう語である。それは時間にすぎない。だがそのようなものを抽象と考えるのはのちの思惟のしかたであって、古代人にとって、時間と空間とはつねに満たされているある実体であり、祭祀や呪術はすべてそれを前提として成立する。それはある靈性の獣によって衛られていた実在のものである。

『漢字百話』中々新書 p48～49)

